平成 30 年度第７回きのくにコミュニティスクールの推進に係る研修会

１　日時・会場　平成 30 年 11 月 12 日（月）13:30～16:30　和歌山県自治会館
２　参加者　　県立学校、市立高等学校の教職員　　合計１１３名
３　内容

◆講演「１０年後も続くコミュニティ・スクールづくり」
文部科学省ＣＳマイスター
山形県　大石田町教育委員会　教育長　布川　元　氏

○高校におけるコミュニティ・スクールのカタチ
小学校は地域共生、中学校は地域貢献、高校は地域課題解決
社会や地域の課題解決が生徒を伸ばす→夢が叶う
高校が市民として認知される

○目指す生徒像：一人前の社会人となれる人材（自分を活かし、社会に貢献）
生徒像の実現に必要な力（学力、人間力、社会力、完成・倫理、･･･）と、それを育む教育活動の明確化
○学校の設置理念・教育目標を実現させるために
→　校是や校訓を分かりやすく解説する
キャッチコピーを考える
○「生きる力」とは、自分の能力を「活かす力」を身に付けること
○家庭と学校と地域の協働で出来ること
→　人づくりのできる「ことづくり」
「ことづくり」を成就させるのは「情熱」
「人づくり」に欠かせないのは「感動」
情熱こそが夢を叶え　感動は人生をドラマに変える

◆ディスカッション
①地域住民との連携を活性化するためには
②地域内の小・中学校等との連携を活性化するためには
③地域を支える人材として活躍できる生徒を育てるには
④学校の特色化・魅力化のためにコミュニティ・スクールが果たす役割とは
⑤教職員・生徒をより多く巻き込んだコミュニティ・スクールにするには
以上の５つのテーマごとに分かれ、さらに小さなグループ（３～４人）を編成して、ディスカッションを行った。

ディスカッション後の講師への質問
○全県一区の高校において、「地域」の範囲をどうとらえるか。また、学校から地域に発信はしているが、地域の協力をどう引き出すか。
→　所在地の市町を中心に考えるのが分かりやすいが、全県を地域としてもよいと思う。地域の協力を得るには、生徒が外に出て行くことが大事。

○ＣＳの運営において困ったことはなかったか。

→　委員の任期を定めていたが、委員の入れ替わりで、前に作った制度の意義が十分に引き継がれないことがあった。また、学校に何を言ってもいいと思っている委員もいたが、「学校の応援団」であることを説明し、理解してもらった。

○生徒を地域貢献活動に参加させる際のポイントは何か。

→　部活動、クラス、生徒会等の単位で動くようにした。地域活動の経験が成績アップにもつながった。また、多くの取組を一度に始めると、つぶれてしまうのも早い。１年に１つの取組を増やすくらいがちょうどいい。

４　参加者の声（アンケートより）

・学校の教育目標を分かりやすく地域に伝えるための方法に工夫が必要であると気付かされた。キャッチコピーや図、または実際に学校や生徒を見て、知ってもらうことを考えたい。

・「ＣＳはツールである」という表現が印象に残った。そのツールを使う私たちは、地域や学校の特性に応じた使い方を考えたい。

・ＣＳ成功のカギは、学校の目指す方向を、どれだけたくさんの人に理解してもらい、一緒に考えてもらうかだと思った。仲間を増やすことを学校でも議論できるようにしたい。

・地域の小・中学校や地域住民と顔を合わせ、親睦を図るしかけが必要だと思った。学校と地域、学校と学校の敷居をいかに低くするかについて考えていきたい。

・地域貢献の取組によって生徒に自己有用感を与えられ、地域のことを知る機会にもなる。また、専門学科においては、地域の課題を専門的な視点から解決する取組は授業の課題研究に位置付けることができると感じた。

・地域連携について悩んでいる学校の意見を聞くことができて良かった。地域交流を子供がなぜしなくてはいけないかを考えさせる前に、やらせようとしている気がする。子供と地域の人がお互いに学び合える、助け合える活動にしなければ、やらされるだけの活動になってしまう。

・ＣＳの運営について大変に感じていたが、少し肩の荷が下りたように感じた。学校の方向性が見えたように思う。

・新学習指導要領の「地域に開かれた教育課程」について具体的なイメージを持つことができた。